

星野鏡三郎ゆかりの地 ― 神奈川県横浜市神奈川区星野町の調査報告

長谷川 倫 子*



(星野町 4 丁目を示す街区揭示板 2011 年 8 月 23 日 長谷川倫子撮影)

* 学芸員 明星教育センター

1. はじめに

本調査では、明星実務学校及び明星学苑の設立時の支援者であった実業家 星野鏡三郎（1859-1932）のゆかり地である神奈川県横浜市神奈川区星野町並びに星野橋を訪れた。これまで、星野町に関しては、星野鏡三郎が横浜海岸沿いの埋立事業を行い形成された町であることまでは判明していた。しかし、その埋立て事業に関する詳細は、把握されておらず、不明確な点が多かった。今回は、星野鏡三郎ゆかりの地である星野町の現地調査や関連文献調査等で得た情報をもとに、星野町並びに星野橋の現在の様子、埋立ての経緯等について報告する。

2. 星野鏡三郎と星野町

星野町の地名の由来である星野鏡三郎は、明治期から大正期にかけ、トンネル建設などの鉄道工業を中心とした土木事業で成功を取めた実業家である。星野鏡三郎の略歴に関する詳細は、前号の「星野鏡三郎の事跡（1）—星野鏡三郎の「履歴書」—」^{*1}においてすでに明らかにされているが、その実業家としての人物像を探る資料は非常に少ない。その数少ない資料の中に、明治期の政財界で活躍した人物の経歴をまとめた『明治人名辞書 上巻』^{*2}があり、その中には以下のように経歴が記されている。

君は東京の人實業界に名ある星野錫^{*3}氏の令弟にして、安政六年十二月六日を以て生れ、後分家す、土木請負業を営む

この資料には、星野鏡三郎自身の具体的な経歴等の詳細は記されていないが、この辞典が発行された大正初期には、すでに実業家として名を知られていたと考えられる。

さらに、これより後に編集された『大正人名辞典Ⅱ 上巻』^{*4}によると、

（前略）安政六年十二月を以て生れ明治廿六年分家す廿九年獨立して土木建築請負業を始め卅八年鐵道工業株式合資會社を創立して其無限責任社員となり四十二年之を辭す大正九年組織を變更して合資會社となし其代表社員たりしが十二年其經營を徳久次郎に委託し相談役となり以て今日に至る先是大正十一年獨力明星實務商業學校を創立し校長に就任後ち同校を明星中學校と改稱するに及び相談役となる曩に東京文具東京印刷各會社監査役たり大正八年十月勅定の紺綬褒章を下賜さる 鐵道協會工學會會員なり宗教浄土宗 趣味育英事業書畫骨董……………

とあり、その出自や事業・趣味等の略歴が紹介されている。この資料に明記されているように、明治29年には、土木建築請負業として独立し、「鐵道工業株式合資會社」^{*5}を創立し、これを辞した後、自身の会社である星野組を合資会社に変更し、相談役を務めた。その後、大正11年には明星学苑の前身である明星実務学校を創立し、その他、数々の育英事業に力を注いでいる。

今回調査に訪れた星野町にまつわる星野鏡三郎の横浜埋立事業に関する詳細は、埋立許可願等の公文書が現存しておらず、埋立ての経緯を示す直接的な文献資料は発見できなかった。しかし、「明星実務学校設置願」の添付書類の中の「十、設立者ノ履歴」^{*6}には、

一 全 年^{*7} 五月 神奈川町地先海面埋立工事ニ着手全廿九年三月成工ス此埋立總坪数八千五百坪五合六乃内千二百五十坪公道路トシテ献納セリ後本埋立地に対シ星野町全地域内橋架ヲ星野橋ト称セラル

と明記されており、星野町一帯が星野鏡三郎によって埋立てられたという事実は、この星野直筆の明星実務学校設立に関する書類によって明らかである。

3. 現在の星野町

星野町は、JR 京浜東北線東神奈川駅・京急本線仲木戸駅より徒歩約 15 分、約 788m に広がる町である。主に造船所や鉄工所などが密集する工業地帯と近年の再開発によって建てられたマンション群が建ち並ぶ住宅街に分かれている。

現地の様子としては、町の大部分が主に造船業などの工業地帯が広がっている。この周辺には民家はあまりみられない。町内は運河に囲まれており、その運河に架かっている星野橋を渡り、橋本町方面へ徒歩 15 分程進んだところにある星野町公園（神奈川区星野町 9）がある。この付近には、高層マンションが建ち並んでいる。横浜市神奈川区役所の「町別世帯と人口」^{*8}によると、星野町の人口・世帯数は、神奈川区人口 227164 人 113856 世帯、645 人 275 世帯で、星野町の人口・世帯数のほとんどがこれらのマンション地帯に集中しているという。

現存している工業事業所数等の詳細は不明であるが、本来工業地帯であった町は、近年、住宅地としての開発が進められてきている。この再開発地域は、コットンハーバー地区と称され、横浜市神奈川区橋本町二丁目、山内町の各一部と共に、2003（平成 5）年 3 月に設立された「山内ふ頭周辺地区画整備組合」によって、2004 年 6 月に区画整理事業が着工された^{*9}。

町内には、JR 貨物の東高島駅^{*10}やその貨物支線の廃線跡^{*11}が残されており、再開発地区の一部とは対照的に、かつての工業地帯横浜の面影を今に伝えている。

4. 星野町の由来

星野町の町名由来については、地名辞典や各自治体年史などの文献には、掲載されている。今回使用した各文献には、以下のように記されている。

I. 地名辞典

①『角川日本地名辞典 14 神奈川県』^{*12}

明治 39 年～現在の町名。はじめ横浜市、昭和 2 年からは同市神奈川区の町名。同市神奈川町地先の埋立地に起立。同 5 年埋立地を編入。同 7 年神奈川町の一部を編入。埋立者星野某の姓をとり命名。世帯数・人口は昭和 8 年 12・74、同 43 年 20・65、同 52 年 14・27。…………。

②『日本歴史地名大系第一四巻 神奈川県地名』^{*13}

明治三八年大野町、同三九年星野町・山内町、同四二年橋本町、…………が成立。同四二年成立の海岸通は大正七年（一九一八）守屋町と改称。…………同三三年鈴繁町が成立した。これらの埋立地の町名の多くは埋立者の姓による。

II. 各自治体年史

①『横浜市史稿』^{*14}

一三 星野町

星野某が神奈川の小傳馬町及び九番町の南方に海面を埋立て、星野町の名を附したもので、其年代は未詳である。

②『神奈川區誌』^{*15}

星野町

星野某が元神奈川町字小傳馬町及九番町地先の海面を埋立たる地なり。明治三十九年十月十六日當町を新設し某姓を採りて町名に付す。而して昭和二年十月一日區制施行の際神奈川區に所属す。

③『区制五十周年記念 神奈川区誌』^{*16}

明治三九年に入って、元土佐藩主、山内家らの出願で埋立をおこない山内町一町目が設置され、同四四年までに四町目までが完成して命名されていった。さらに同年、星野^(ママ)京三郎が神奈川小伝馬町、九番町先の海面を埋立て、星野町と命名した。

この地域の埋立申請者の大野、林、星野、橋本らは山内侯爵家が認可を受けた埋立予定地を分割して譲りうけたものである。埋立の権利を受け、それを分譲することによる投機的な利益が得られるため、中央政界とつながる人たちはそれを利用して大いに活躍した。また、申請者は認可を得ると、これを請負わせて工事を進めた。この地域では大野力松らが請負い、土砂は権現山、堀ノ内の宝生寺境内（南区堀ノ内町）から運んで埋立てた。

④『横浜の町名』^{*17}

明治三十九年に星野氏によって埋め立てられ、神奈川町字小伝馬町および九番町の南方の海面地先から新設した町。埋立者の姓「星野」を採った。

これらの資料に共通して記されているように、星野町の町名は、星野の姓より名付けられていることは明確である。しかし、大半の資料は、「星野某」などその姓のみで、「星野^(ママ)京三郎」^{*18}と姓名で記載されているのは、各自治体史内の③『区制五十周年記念 神奈川区誌』のみである。また、この資料には、埋立事業に関する経緯や目的が詳細にされており、星野町が埋立予定地の分譲により、権利を受け埋立てられたものであり、その目的は、「投機的な利益」を得て、「中央政界とつながる人たちはそれを利用して大いに活躍した」ということが判明した。

ちなみに、それぞれの資料に明記されているように、神奈川区の海岸沿いの埋立地は、星野町同様に埋立者の姓が町名として残されている。このような埋立者に因む地名がまとまって存在する例は、神奈川区海岸沿いに集中しており、全国でも珍しいという。

さらに星野町の埋立後には、その事業の功績を称えられ、星野橋が架けられた。橋の架設については、前述の明星実務学校設立の際の履歴書に「本埋立地に対シ星野町全地域内橋架ヲ星野橋ト称セラル」と明記されている。しかしながら、年代等の橋の由来に関する詳細は、履歴書内には明記されておらず、残念ながら現地にも残されていなかった。

しかし、「神奈川県立公文書館 アーカイブス検索」^{*19}の結果、『大正12年 小港、鶴之、山吹、扇、日本橋図面 衛繕管財課 第40号』の資料件名に、「星野橋架換工事・SHIP BILL FOR HOSHINO BASHI」との記載があり、星野橋架設の年は、大正12年であると推測される。また近接する「竜宮橋」^{*20}の竣工が、「大正12年7月」とあり、同時期に星野橋が架設されたとすれば、その竣工は、大正12年まで遡ることができる。現在の橋は、平成16年5月に新たに架け直されたもので、その下を流れる運河には、現在も多くの船が泊められている。

星野橋の先にあるマンション群の近くには、星野町公園がある。この公園自体は、コットンハーバー地区開発時に新設されたものであるが、この星野町公園から東高島駅一帯には、1859（安政6）年に勝海舟が設計にあたり、伊予松山藩によって構築した神奈川台場の遺構^{*21}の一部である。その台場跡地を埋立てたのが現在の星野町の一部であり、星野町公園内にもその遺構がみられる。



(平成16年5月竣工の現在の「星野橋」 2012年8月23日 長谷川 倫子撮影)



(再開発地域であるコットンハーバー地区内にある「星野町公園」、園内には勝海舟設計により設計された神奈川台場遺構が残されている。

2012年8月23日 長谷川 倫子撮影)

4. おわりに

今回の調査では、星野鏡三郎ゆかりの地である星野町・星野橋について調査した。星野町は、現在ではあまり明確ではない星野鏡三郎の足跡を伝える町であり、一部は明治の開港以来工業地として発展した横浜の面影を伝え、また一方では再開発によって変化を続ける横浜の今がみられる町であるといえる。本調査で、星野町が埋立てられた経緯により、実業家としての星野鏡三郎の実像を垣間見ることができた。

また、その埋立て事業は明治期の横浜の歴史とも深い関わりを持っているとみられる。今回は、星野町埋立てに関する現地に残された明確な痕跡や直接的な資料の発見はなかったが、更なる研究調査を行い、星野町の歴史と実業家としての星野鏡三郎の実像を今後も追っていきたい。

註

- *1 高島秀樹「星野鏡三郎の事跡（1）—星野鏡三郎の「履歴書」—」（『明星—明星教育センター研究紀要第2号』、明星大学、2011年）所収。
- *2 高島義夫『明治人名辞書 上巻』、日本図書センター、1987年10月。底本は、古林亀治郎編・発行『現代人名辞典』第二版（大正元年、中央通信社）。
- *3 星野錫（1855-1938）は、星野鏡三郎の長兄。明治から昭和前期に活躍した実業家であり、王子製紙を経て、東京印刷株式会社を創立する。東京商業会議所副会頭などを務め、明治45年には衆議院議員となる。田園都市株式会社（現、東京急行電鉄・東急不動産の祖）創設の発起人の一人でもある。その他に、大正6年12月に創立に関わった富士鉄鋼の工場は横浜に建設され、横浜という地にゆかりが深い。
- *4 高野義夫『大正人名辞典』、日本図書センター、1989年2月。底本は、猪野三郎編『大衆人事録 昭和3年版』、帝国秘密探偵社、昭和2年』。
- *5 鉄道工業株式会社。菅原工務所の菅原恒覧（1859-1940）と創立し、鉄道敷設に関する工事を専門に請負っていた。初代社長は菅原恒覧。
- *6 東京公文書館所蔵、『大正11年 学事 私立学校 第一種 冊ノ六二』薄冊、所収。
- *7 同資料の前行に明治39年とあり。
- *8 2012（平成24）年7月31日現在。
- *9 「山内ふ頭周辺地区のまちづくり」（「横浜市都市整備局 HP」<http://www.city.yokohama.lg.jp/toshi/yamanouti/yamanoucti.html>）より。
- *10 現在は車扱貨物の臨時取扱駅となっており、2005（平成17）年度を最後に、実際に貨物列車が発着することはない。
- *11 1959年まで東神奈川駅へ向かう貨物支線の廃線跡で、運河に架かる鉄橋が当時の姿のまま残されている。
- *12 角川日本地名大辞典編纂委員会 竹内理三編、角川書店、1984年6月。
- *13 下中邦彦編、平凡社、1984年2月、167頁。
- *14 横浜市役所、臨川書店、昭和7年10月、92頁。
- *15 横濱市神奈川区役所、昭和12年10月、44頁。
- *16 神奈川区誌編さん刊行実行委員会、昭和52年10月、314頁。
- *17 横浜市市民局、平成8年12月、44頁。
- *18 名の誤字に関しては詳細不明であるが、前述の履歴書内での記載などから、「星野京三郎」は、星野鏡三郎本人であると断定できる。
- *19 平成24年8月27日調べ。
- *20 横浜市神奈川区千若町にある運河に架けられた橋。神奈川区には浦島伝説が伝わっており、この橋の由来もその伝説から名づけられたと考えられる。
- *21 徳川幕府の命により、伊予松山藩が構築した台場で、勝海舟の設計により、江戸末期の1859年（安政6）に着工され、翌1860（万延元）年に竣工した。1884（明治17）年には、横須賀鎮守府の管轄となり、1899（明治36）に廃止された。砲台は設置されていたが、実戦に使用されたことはなく、諸外国の来賓が港に入った際の祝砲を上げるために利用されていた。

参考文献

- 高島秀樹「星野鏡三郎の事跡（1）—星野鏡三郎の「履歴書」—」（『明星—明星教育センター研究紀要第2号』、明星大学、2011年）

- 高島義夫『明治人名辞書 上巻』（日本図書センター、1987年10月）
高野義夫『大正人名辞典』（日本図書センター、1989年2月）
「明星実務学校設置願」（『大正11年 学事 私立学校 第一種 冊ノ六二』 簿冊、東京都公文書館所蔵）
角川日本地名大辞典編纂委員会 竹内理三編『角川日本地名大辞典 14 神奈川県』（角川書店、1984年6月）
下中邦彦編『日本歴史地名大辞典第一四巻 神奈川県の地名』（平凡社、1984年2月）
横浜市役所編『横濱市史稿』地理編（臨川書店、昭和7年10月）
横濱市神奈川区役所編『神奈川区誌』（昭和12年10月）
神奈川区誌編さん刊行実行委員会編『区制五〇周年記念 神奈川区誌』（昭和52年10月）
横浜市民政局総務部住居表示課編『横浜の町名』（平成8年12月）
横浜市『横浜市史 第五巻上』（1971年）

参考資料

- 横浜市都市整備局「山内ふ頭周辺地区のまちづくり」
<http://www.city.yokohama.lg.jp/toshi/yamanouti/yamanoucti.html>
神奈川県立公文書館「アーカイブズ検索 星野橋」
http://kanagawa-archives-search.force.com/Gov_p0520